

A-XIV-6

交通事故による遷延性意識障害患者の在宅介護の現状 —アンケート調査による分析—

財団法人広南会広南病院¹ 東北療護センター(NASVA),² 同看護部,³ 同脳神経外科,⁴ 福島県立医科大学看護学部

○小林美佐枝^{1,2}, 伊深洋子^{1,2}, 大友昭子^{1,2}, 川熊のぶい^{1,2}, 斉藤 薫², 中里信和^{1,3},
長嶺義秀^{1,3}, 藤原 悟³, 結城美智子⁴

【目的】交通事故による頭部外傷により重度の後遺症を受けた遷延性意識障害患者の多くは、必要な治療を受けても患者・家族の期待する回復までには長い時間を要し、在宅の場合は家に閉じこもる傾向があると言われる。しかし、介護を担う家族の負担の実態については十分に明らかにされていないのが現実である。今回、当センターを退院後在宅介護に移行した患者の方々の生活状況や介護者の負担の実態について、アンケート調査を実施したので報告する。【対象・方法】対象は退院後現在在宅介護中の患者19名。当院倫理委員会の承認を得た後にアンケートを送付した。在宅介護に関する一般的質問のほか、治療内容、ADL、社会とのかかわり、必要とする介護などについて質問した。【結果】19名中12名(男性9名、女性3名;20代8名、30代3名、60代1名)から回答があった(回収率63.2%)。在宅介護期間は1ヶ月から最長6年10ヶ月(平均2年1ヶ月)であった。回答で多かったことは、1)ショートステイの受け入れに時間を要した、2)公的福祉サービスの利用に関して大きな制限がある、3)24時間介護のため体力的・精神的問題がある、4)喀痰吸引を要するので夜間の介護が大変であるなど、介護者の精神的・身体的負担は予想以上に大きかった。さらに現場の声として、レスパイト入院の受入れ施設の増設や公的福祉サービスの拡大を切望していた。【まとめ】対象患者のADLの自立度は低く、介護は将来にわたって長期に及びがちである。在宅介護者の精神的・身体的負担は予想以上に大きく、レスパイト入院受入れ施設の増設や公的福祉サービスの拡大を望んでいることが明らかとなった。